

資料保存方策雑感

奥　島　孝　康

一　もう十数年前の話である。当時、パリに留学していた私は、夢中で古本屋の倉庫をはいずりまわっていた。いうまでもなく、私の専門とするフランス商法関連の資料を探すためである。

パリに着くとすぐ、ビブリオテック・ナシオナル（BN）の入館手続を終え、かねてから一度手にしたいと夢見ていた文献を次々借り出し、いじくりまわしては感激に浸っていたが、一月もすると、やや当初の興奮もおさまり、さてこの資料をどう料理するかということを考え始めた。私の悪い癖で、資料には、線を引いたり、欄外にメモを書き入れないと読んだ気にならないことから、そのコピーを試みたが、当時のBNのコピーはいわゆる湿式というおそまつなもの、きわめて紙質が悪い上、うっかり日光に当てたりしようものなら、字がすべて消えてなくなるというような有様であった。そこで、マイクロフィルムに撮ってもらうことにして、わざわざサンジェルマン・デ・プレの著作権協会へ出向きオートリザシオンを得るというまことに煩雑な手続を余儀なくされた（結局、日本円で五十万円ほどかけて、約五十冊ほどをマイクロフィルムに撮った）。

そんなある日、スフロ通りの古本屋で、何気なくこんな本はないかと訊ねてみたところ、「ウイ、ムシュー」とい

とも簡単に倉庫から取り出してくるのではない。翌日、十数冊のリストを持参したところ、これまた、ワラワラとその大半が目の前に積み上げられたのである。このとき、私は留学の成功(?)を確信した。

私の留学の目的は、まことに明快であった。すなわち、私は、世界で最初の商法典(一六七三年のいわゆるサヴァリー法典)と世界で最初の近代的商法典(一八〇七年のナポレオン法典)を制定したフランスへ出かける以上、いまだにほとんど処女地ともいふべき「フランス会社立法史」という分野の研究にのみ専念しようと考えていたからである。そして、その目的は、資料収集という点ではほぼ九九パーセントまで達成することができた。しかし、帰国直後から行政職にふりまわされたため、その研究成果の発表という点ではほぼゼロという無惨な結果に終わった(その研究は依然としてこれからの私の最大の課題なのである)。

二 なぜ、このようなクダナイ話を長々と書いてきたかというと、この資料収集の過程で私が体験したことが本稿のテーマに関連しているからである。それが酸性紙との出会いという体験である。

私がパリやリヨンの古本屋の倉庫を埃まみれになってはいずりまわって集めた資料の量と質は、フランス会社立法史に関するかぎり、少なくとも日本では他に比肩しうべきものは見られないと思われる。しかも、私は、これらの資料をきわめて安価で入手したのである。そうした資料でナポレオン商法典に関するものの中に、ページをめくろうとするとポキリと紙が折れてしまう書物が含まれていることに気づくまでにはそう長くはかからなかった。考えてみれば、ナポレオン商法典の注釈書や解説書の類の出版された時期がいま一番酸性紙問題に直面しているわけである。このときの体験が、濱田前館長の構想されていた「明治期資料のマイクロ化事業」を断固発足させる決断にいくらかはつながったといつてよい。

もし酸性紙本を大量にかつシステムチックに脱酸化する妙手があるとしても、研究者の利用に供するためには、そ

の原本を保存し、マイクロフィッシュ化して存分に利用させる方を講ずべき必要性はいささかも減ずるものではない。その意味で、明治期資料マイクロ化事業は、今後ますます重要性をますことになる。もっとも、この事業は一私大図書館の手には余るものであり、近い将来、全国の図書館が協力して共同事業化していく方向が探られねばならない。

では、酸性紙問題を含めて、いわゆる紙資料の保存政策なり保存計画なりを、わが図書館としてはいかに取り組むべきであろうか。この点につき、木部徹氏は、わが図書館の広報紙『ふみくら二一』において、早大図書館紀要三十号特集のテーマに「総合学術情報センター計画として『図書館の新世紀を迎えて』とありますが、資料保存政策も保存計画も無しで、新世紀もないものです。」と痛烈な批判を寄せられていることは周知のところであろう。もっとも、木部氏の批判は、資料保存問題に関心をもつほどの人であれば、誰しも共通してもつ想いであろうといつてよい。それだけに、わが図書館としても、この問題について今後の本格的な取り組みを真剣に考えねばなるまい。そこで、今後の検討のために、ここでは私のこの問題の考え方の大枠のみを示しておくことにしよう。

三 資料保存問題は、木部氏の指摘されるとおり、まさしく「百年戦争」である。したがって、この問題への取り組みには長期的展望に立った明快な方針（＝政策）を必要とすることはいうまでもない。たとえば、わが図書館内に「修補室」を設けて、資料保存の担当者を数人置くとして、はたしてその人を得ることが可能であろうか。仮に館内から希望者が出るとしても、その人に、きわめて高い水準の保存の専門技術をもつアルチザンとしての生涯を送ることを求めうるであろうか。また、そうしたアルチザンの後継者を次々と養成していくことが可能であろうか。アルチザンが手厚く保護されているフランスにおいてすらも、その後継者養成は次第に困難の度を増してきているのである。私は、端的にいつて、一早大図書館において、資料保存のためのアルチザンを新たに採用し、養成もすることは

制度的には無理であると考えている。つまり、現在の職員採用形態自体の大幅な変更は難しい上、長期的展望をもった採用・養成の制度化なり組織化なりの方針を確立することは困難であると思うのである。

たしかに、わが図書館にも、図書館員としての使命感と情熱とで、この問題に取り組む決意をもつ人がいないわけはなからう。しかし、生涯をアルチザンとして取り組むだけの情熱を持続しうる館員をかなりの人数かかえることは、採用形態においても予算措置においても、一私大図書館にとっては至難のわざといわねばならない。けれども、他方、本部氏のいわれるように、「もし、早稲田大学図書館が『資料保存』をきっちり政策課題に組み込むことができたなら、それは他の日本の研究図書館にとって得がたい難型となりましょう」という指摘は確かに正しい。ではどうするか。わが図書館の課題であることは明確だが、具体的手立てとなると、これはきわめて解決困難な問題といわねばならない。つまり、縁の下の力持ちは必要だが、では誰がその役割を引き受けるか。一時的情熱にかられてやり抜ける仕事ではない。いかにしてその情熱を持続させる方策を立てうるか。まさしくそこにこそ、アルチザン消滅の原因がある。したがって、制度的対応には、たとえ採用形態の変更や予算措置の確保のネックがクリアーできたとしても、かなり決定的な限界があると考えられるのである。

四 しかし、この問題を考える上で、まったく朗報がないこともない。国会図書館では今年を「保存元年」として、資料保存課長となった安江明夫氏を中心に、本格的に酸性紙対策に乗り出すという報道がそれである（朝日九〇年一月六日夕刊三面）。私は、国会図書館だから「当然」とは考えない。国会図書館としては遅きに失したきらいはあるが、しかし、安江氏のような人を得て、制度的・組織的にこの問題に正面から取り組みを始めたことはまことに「英断」である。その意味で、すでに、「賽は投げられた」のである。

もともと酸性紙問題は、ややステレオタイプ化すると、「一国の文化の危機」の問題である。したがって、その対

策もナショナル・プロジェクトのレベルで立てられなければならない。その意味で、国会図書館は、その本来的責務としてこの課題に取り組みを開始したわけである。しかし、当然のことながら、私は、これは一私大図書館の取り組むべき課題ではない、などというつもりはない。早稲田にも、豊富な明治期資料を収蔵している図書館として負うべき責務が当然ある。その重さは、国会図書館と比較してどうこうという性質のものではない。われわれもまたその責務をはたさなければならない。

では、早稲田大学図書館としては、この問題にどう取り組むべきか。私は、この問題こそ図書館の「相互協力」の問題であると考える。わが国では、相互協力というところ、せいぜい資料のレンディングの問題というイメージしかない。いや、それもかなり不十分である。まして、資料保存問題が「相互協力」の最大の課題の一つであるなどといったら、現状認識の欠如を笑われるのが関の山かもしれない。しかし、それでも、私は、この問題こそ相互協力をもつとも必要とする問題だと考えている。研究図書館のうちに、単館でこの問題に正面から取り組んでいる図書館がないのは、なにもこの問題の所在に気づいていないからではない。気づいていても、現実に取り組むだけの力量も体制もないからにすぎない。しかし、単館では無理だとしても、複数館の相互協力ないしジョイント・ベンチャーとしてなら可能性は十分ある。全国の大学図書館が協力して、地域ごとに資料保存のセンターを設けることができれば理想的だが、そこまでいかずとも、せめて十館程度の図書館が協力すればセンター設置は可能である。センターを、独立の企業組織とするか、契約関係にすぎない組合組織とするかは別としても、いずれにしても、そのセンターで働くことに人生の展望が与えられるようなシステムを構築しないかぎり、私大図書館における資料保存の問題は現状の手詰りを脱することはできないであろう。その意味で図書館の積極的・実効的協力のあり方を今後さらに検討する必要があると考えるのである。

そうした角度からこの問題を考えていると、わが「本庄保存図書館」の存在に注目しなければならないことに気づく。すなわち、現在工事中の新中央図書館が完成すると、本庄保存図書館に別置されている資料はいったん新中央図書館にバックすることになるし、各部局図書室の別置本も、現在の図書館が「本部キャンパス図書館」（分館）として再整備されると、これまたそこに戻ってくることになり、本庄保存図書館は、その本来の「保存図書館」としての役割を再検討すべき時期が到来する。この時期が資料保存問題にわが図書館としてどう取り組むかの基本方針を立てるまたとないチャンスである。本庄保存図書館では、資料の「修補」まで含めた「資料保存」が考慮されるべきだからである。

もっとも、その場合でも、私は、図書館の共同事業として、本庄保存図書館における資料保存事業は展開されるべきだと考えている。それは、単に地理的位置のせいだけではない。数人の固定要員で事業が発展的契機をつかみうるとは、とても考えられないからである。いづれにしても、この問題の検討は近く開始したいと考えている。

五 この年末から新年にかけて、私が読んだ本の一冊に、宮下志朗『本の都市リヨン』（晶文社）がある。フランスのルネサンス期、出版の黄金期を誇ったリヨンは、出版の歴史の舞台から突然姿を消す。時は下って、一九世紀の資料も消滅の危機にさらされている。

しかし、「メルシエール街の書物」は残り、「一九世紀の書物」は姿を消す……。あたかも、出版都市リヨンのように……などということにはならないであろうが、「まさか」という危惧は常に現存する。資料保存のために、図書館の積極的な相互協力を実現するための働きかけの必要性を痛感し、その作戦を練りながら、また一歳馬齢を加える仕儀となった次第である。

（一月八日記）

（おくしま たかやす 図書館長）